

日本生活協同組合連合会と食品安全委員会委員との懇談会

1. 日 時：平成 16 年 9 月 24 日（金）15：00～16：00

2. 場 所：食品安全委員会室（7 階）

3. 出席者：＜日本生活協同組合連合会＞

専 務 理 事： 品川 尚志

安全政策推進室長： 渡邊 秀一

渉 外 広 報 部： 木船 文教

組 合 員 活 動 部： 中野 勲

＜食品安全委員会委員＞

寺田委員長、寺尾委員長代理、小泉委員、見上委員、中村委員

＜食品安全委員会事務局＞

齊藤事務局長、一色事務局次長、小木津総務課長、村上評価課長、
杉浦情報・緊急時対応課長、藤本勧告広報課長、富澤評価調整官

4. 議 事：

(1) 委員長挨拶

(2) 出席者紹介

(3) 意見交換

5. 意見交換の主な発言（ : 日本生活協同組合連合会側発言, : 委員及び事務局側発言）

（新聞等マスコミ報道について）

: 一部のマスコミでは、委員会が了承した「中間とりまとめ」の部分的な情報のみが強調され、「米国産牛肉の輸入再開」と結び付けた報道が展開されているのが危惧される。生協を含めて消費者等の理解が総合的に進むことが重要で、正確で公正な報道がなされるよう食品安全委員会としても努力をして欲しい。

: 報道については、一部の偏った情報のみが独り歩きしている点が気になっている。国民の関心が非常に高いということの現われだと思われる。

日常的なマスコミとの相互理解が不足しているのかもしれないが、論説・解説委

員との懇談の機会を設けるなどの取組みも行っている。引き続き理解促進に努めていきたい。

：「20ヶ月齢以下の牛の検出限界」や「全頭検査」の問題が突出し、BSE 感染防止策の中でも SRM の除去やと畜場での汚染防止策の問題など対策全体に目が向けられない状況がもたらされている点を危惧している。

：SRM の除去が大切であること、日本人全体についてのリスクは低いこと、こうした事実をきちんと知ってもらいたいと思っている。

最大限のリスクを考えた場合で日本人が vCJD に感染する可能性は1人いるかいないかであるが、このあたりも誤解を与えず説明していくことが難しい。

（と畜場等における汚染防止策及び米国のBSE対策のリスク評価）

：感染実験のほかに、と畜場等における汚染防止策についても評価を進めて欲しい。また、今後、管理官庁において、米国産牛肉の輸入再開について議論が進められた場合には、検査問題だけでなく米国のBSE対策全体についてもリスク評価を行って欲しい。

：SRM の除去は非常に重要であり、今後も、効果的な方法等を検討していきたい。管理官庁から米国産牛肉の輸入再開の検討等で、評価依頼があれば、米国のBSE対策に関わるリスク評価を行って行きたい。

（効果的なリスクコミュニケーションのシステム作り）

：日本におけるBSE対策の決定に当たっては、リスク管理機関として十分なリスクコミュニケーションを行うよう農林水産省及び厚生労働省に安全委員会から要請していると認識している。

効果的で多様な形態のリスクコミュニケーションの仕組みを作っていくことが重要ではないか。

：今回の「中間とりまとめ」については、今後の予定も含め、全国6ヵ所で意見交換会を行うこととしている。

意見交換会の問題点としては、スケジュール的に毎回ぎりぎりに決まるため、皆さんに日程をお知らせするのも直前になってしまうこと、平日午後開催が多く限られた層の人の参加になってしまうことなどがある。そのため、中間とりまとめ

に関する意見交換会は、東京では木曜日の夜、大阪では土曜日の午後に開催した。今後もできるだけ、工夫していきたい。

意見交換会の参加者については毎回同じようなメンバーになってしまっている。より幅広い層の参加を促すために何かアイデアがあれば教えて欲しい。

：子育てをしている世代からは、生協の企画を子供が学校に行き、帰ってくるまでの時間にして欲しいとの要望もある。このことから、意見交換会への平日午後の参加は難しい部分があるのではないか。

また、各地域生協の中でも組合員の役割分担があるため、いつも決まった組合員が参加しているのではないかと思われる。意見交換会への参加者は地元に戻り、所属生協に報告している。このような報告は他の組合員からの信頼性が高いと思われる。食品安全委員会としては、このような形の情報伝達に当たって、資料配布など何らかの支援をするシステムを考えることも必要ではないか。

さらに、リスクコミュニケーションの推進ということでは、既にホームページに掲載されているものもあるが、問題が発生した段階で、事実関係など消費者に分かりやすいQ&Aを作成し、情報提供していくことも必要と思う。

意見交換会については、マスコミでは色々な報道がなされているが、どのような意見があったか、また、意見交換会の雰囲気がかかるような1枚程度の簡単な概要報告を委員会として即時に公開してはどうか。

：食品安全委員会では、情報を全てホームページで公開している。しかし、主婦層などからは、リスク評価の結果については、難しくてわかりにくいという指摘もある。このため、できるだけ分かりやすい情報媒体として季刊誌を発行し始めたところである。中間とりまとめについてもその特別号を作成し、わかりやすい情報提供に努めたい。

：意見交換会の参加者の中でも、難しすぎてわからないという人もいる。日本生協連で行っている取組みで有用なものがあれば教えて欲しい。

：多くの生協では、「個々の課題を理解するための学習会」と「食品の安全全般についてみんなに知ってもらうための場」とを分けて企画している。

食品安全モニターについても、一般的消費者レベルの層とある程度専門的知識がある層とを分けて募集してはどうか。

また、意見交換会で出た意見については、会場の参加者がその意見についてどのように受け止めたかという聞き手の言葉を、了解を得て実名入りで別途取りまとめで公表することをしてよいのではないか。

(日本人の vCJD 感染のリスクについて)

：一部地区では、90%以上の日本人が M/M 型であり、vCJD 発症のリスクがイギリス人よりもさらに高いのではないかとすることを問題点にしていると聞いているが、委員会としてどう捉えているか。

：専門調査会ではそのリスクも勘案し、日本人では 1 人未満の発症と試算した。vCJD は遺伝病ではなく、また、日本人には脳などを食べる習慣もないことからさらにリスクは低いものと思われる。